

蒼井村正

表紙イラスト：

みかん。



レッドエンforcer ルージュ

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『レッドエンフォーサーラージュ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



レッドエンフォーサー ルーゴ

蒼井村正
表紙／みかん。

登場人物紹介

Characters

ルージュ・パルサー

昼は記者として働くが、夜は液体金属装甲「ルージュスキン」を身にまとい、密かに犯罪者と戦う女性。

たかねざわ ひろこ

高根沢 寛子

ルージュの叔母にあたる女刑事。親を亡くしたルージュの母がわりとして、彼女と同居している。

銃声と爆発音がひっきりなしに交錯し、深夜のオフィス街を揺るがせた。

市街戦さながらの戦闘を繰り返しているのは、ごついパワードスーツに身を包んだ連中である。

グレネードランチャーや機銃を搭載した、身長三メートルあまりの巨体が脚部に仕込まれたホイールから火花を散らして疾走しつつ銃撃戦を繰り返して、流れ弾と爆風がビルの窓や壁を打ち砕く。

パワードスーツをこよなく愛するメカフェチ過激派たちが創設した武装組織、「アイアンコングス」の内部抗争だった。

組織の覇権をかけて、総数十二体の装甲強化服が入り乱れ、乱戦が繰り返されている。ハイテク産業の基幹都市であるここ、マキナシティには、高度な技術を悪用して無法の限りを尽くす犯罪組織がいくつも存在しており、毎日のように大小の事件を起こしているのだ。

重武装を施された装甲強化服同士の戦闘は激化しつつ拡大し、急行した治安局の連中も、周囲を封鎖して事態の推移を見守ることしかできない状況であった。

このまま戦闘が続けば、オフィス街の一角は完全に廃墟と化してしまうだろうと思われたそのとき。

「そこまでよっ！」

凜と透き通った女の声が異形の集団にかけられた。

ほの赤い燐光を放つカメラアイが声のした方向にグレイツ、と動き、月光を浴びてビルの屋上に立つ人影を捉える。

声の主は、メタリックレッドの輝きを放つボディスーツ状のコスチュームをまとった女性であった。

頭部には小さな翼のような突起がついたバイザー風のアイマスクを装着しており、身体にぴったりと密着したスーツの表面にはメリハリのあるボディラインがくつきりと浮かび上がっている。

肩口から上腕部にかけては程よく鍛え上げられた筋肉のラインが浮き出しており、ゴム毬のように張り詰めたバストはGカップは確実に超えるサイズの、まさに爆乳。

薄く密着度の高いコスチュームの表面には、程よく鍛えられた腹直筋の凹凸や、縦長のへその窪みまでもがはつきりと見て取れた。

胴回りはきつく抱き締めたら折れてしまいそうなほど細く引き締めまり、逆ハート型のヒップは、バストに負けぬポリウムを誇示して左右に張り出している。

むっちりたくましく張り詰めた太腿からすらりと伸びた脚線美は、少女の躍動感と成熟した女性の色香を併せ持っていた。

バイザーの下から覗く顔の下半分では、真紅にきらめくコスチュームよりも鮮やかな朱

唇が一文字に引き結ばれている。

シャーブに尖った頬からあごのラインからは、彼女が怜悧な美貌の持ち主であることが察せられた。

月の輝きを背負い、ルビー色の光輝に縁取られた極上のプロポーションに、パワードスートの一団はしばし動きを止めて魅入ってしまう。

「たああっ！」

その隙を逃さず、深紅のメタルスーツは掛け声とともに宙に身を躍らせた。

空中で数回トンボを切った女性は、石畳の上に軽やかに降り立つ。

着地の衝撃で豊かなバストがプルルンッ！ と派手に揺れ弾み、メタリックコスチュームに包まれた肉果が抜群の弾力を發揮して元の形状へと復帰させる。

「レッドエンフォーサー！」

「あの女が噂のクリムゾンスラッシュャーかッ！」

畏怖の響きを含んだ声で、パワードスーツ同士の通信が交わされた。

モーターの低い唸りと金属の軋みを立てて、十丁を越す機銃とロケットランチャーがレッドエンフォーサーと呼ばれた女性に向けられる。

「オレたちの前にこのこの現れやがって、ミンチになりたいか？」

拡声器で増幅された声と同時に、レーザーサイトの光点が女体のそこかしこに照射され

た。見事なバストの曲面、バイザーに包まれた頭部、乳房に勝るとも劣らぬポリウラムのあるヒップ、恥丘のふくらみもあからさまな股間のVゾーンにもレーザーの狙点が紅く揺らめいている。

圧倒的な火力を秘めた武器に囲まれているにもかかわらず、真紅の女性に怯えた様子はない。それどころか、バイザーの下から覗く朱唇には楽しげな笑みすら浮かんでいる。絶対的な自信に満ち、どこかしら妖艶なものを感じさせる笑みであった。

「おまえたち悪党は……一匹たりとも逃がしはしないッ!! ターゲットロックオン!!」
勇ましい声を上げた女性のバイザー内に、次々にロックオンマークが点灯してゆく。二秒と経たずに全てのパワードスーツがロックオンされた。

「ストリングブレイド、ブレイクッ!!」

叫びとともに前方に突き出された両掌から、数十条の紅い輝線が迸る。

キュイイインッ! エレキギターの弦を掻き鳴らすような音を立てて、極細のメタルワイヤーが降り注いだ。

装甲服に装備されていた武装が次々と切り落とされ、重い金属音を立てて路上に転がる。数十条の赤い輝線はまるでみずからの意思を持つているかのような動きで滑らかに打ち振られ、パワードスーツの装着者には傷一つ負わずに武装と動力パイプだけを確実に斬り裂いてゆく。

高出力のレーザー光線のごとき、超絶の切断能力であった。

この能力ゆえ、彼女はクリムゾンスラッシャー真紅の斬撃者とも呼ばれている。

「ぐあああ！」

「う、動けねえッ！ 畜生ッ!!」

武器を破壊され、動力伝達を断たれた装甲服は、金属の牢獄となって搭乗者たちを封じ込めてしまう。

一方的な戦闘はわずか数秒で終わった。

切断されたパイプからマシノイルを噴きこぼし、バチッ！ バチバチッ！ と音を立てて漏電のスパークを散らしながら、ガラクタと化したパワードスーツたちが次々に倒れ伏してゆく。

動力を断たれたことでオートバランサーが停止し、姿勢制御ができなくなったのだ。

全ての強化服が戦闘能力を失ったのを確認し、レッドエンフォーサーはふうふうーっ、と大きく息を吐き出した。

「……もう終わり？ 物足りないわ。もつと楽しませてよ」

転がった強化服どもを見回しながら、ちよつと物騒な口調でつぶやきつつ、メタリックスーツの女性はたわわなバストを両手ですくい上げる。

金属光沢を放ちながら、ボディペイントのごとき柔軟性を見せるボディスーツにピッチ

「寛子姉さんッ！ ダメえ、やめてえ！ お願い！」

姉同様に慕った同居人が目の前で辱められるのを見せられ、悲愴な声を上げるルージュ。なにもできない自分の無力さが腹立たしく、悔しい。

兵士たちは無言のまま、てきぱきと動いて陵辱命令を実行していった。

洗浄を終えたばかりのアヌスに亀頭がめり込み、ブラジャーをずらして乳房が揉みこねられる。両手にも無理矢理に勃起を握らされ、手淫奉仕を強要された。

何か叫ぼうとした口に手早く開口具がはめられ、開いたまま固定された口にまでペニスが入り込む。股間には無骨な顔立ちの男が顔を埋め、わざとらしい舌なめずりの音を立てて性器をしゃぶり責めた。

「気の強い女は、ケツの穴が弱点つてのはホントだな。今回も大当たりだぜ！」
長いストロークで女刑事のアヌスを犯しながら、マッコイな男は声を上げる。

十分と経たぬうちに、犯される寛子の腸内に、口に、苦しげにしかめられた美貌に、白濁のスペルマがぶちまけられた。精液まみれの身体を前後から挟み込み、ヴァギナとアヌスに牡槍が容赦なく突き込まれる。

ルージュの眼前で、壮絶きわまりない輪姦シーンが繰り広げられた。

「あの女刑事を救いたければ、兵士たちに奉仕するんだ」
犯される寛子を見ながら、ネーナは冷たい口調で命じてくる。

「……わかりました。アタシが奉仕するから、姉さんにそれ以上酷いことしないでッ!!」

レッドエンフォーサーの叫びが、甘い響きを帯び始めた寛子の喘ぎを圧して響く。

「おまえたち、こつちを使つていいぞ。ただし、私にはスペルマをかけるなよ」

ルージュのヴァギナとアヌス突き上げつつ、冗談めかした口調で命じるネーナ。

待ちかねていたかのように、何本ものペニスが真紅のメタルヒロインを取り囲んだ。

「手で擦つてやれ……胸も使つていいぞ」

思うように動けぬ手にペニスが握らされた。メタルスキンを通して、熱く猛つたペニスの感触が伝わってくる。獣臭い精液のにおいが鼻を突き、汚辱感をつのらせた。

「こうやって動かすんだよ！ 五分でイかせないと女刑事をもう一回犯すぜ！」

手首を握られ、手淫奉仕の動きを強要される。悔しさを堪え、レッドエンフォーサーは牡器官の胴に沿って指をストロークさせて快感を送り込む。金属の冷たさと滑らかさに、素手のしなやかさと柔らかさを併せ持った指が、いきり勃つた男根に絡んで滑る。

刺激を受けたペニスがビクビクビクツツと指の中でしゃくり上げ、鈴口から先走りが溢れ出て真紅の指をぬめらせる。

「この女、なかなか手コキが上手いぜ。冷たい指がたまんねえ！」

兵士が上げる嬉しげな声も、ルージュにとっては屈辱でしかない。大切な同居人を陵辱者の魔手から守るためには、兵士たちに奉仕して満足してもらうしかない。

チユクチユクとりズミカルな音を立てて、メタルレッドの指が勃起をしごく。

「金属のひんやりした感触に生乳の弾力、こいつは気持ちいいであります！」

メタルスキンを駆使したパイズリに、まだ少年のような兵士は快感の声を漏らす。

たわわなバストの狭間に牡臭い剛直が挟み込まれて揉みこねとピストンを開始していた。Gカップオーバーの美巨房はペニスをすっぽりと包み込み、絶妙の弾力で圧迫して牡器官全体に悦びを送り込む。乳房が揉みこねられ、果肉の狭間で牡槍がスライドするたびに、少年兵とメタルヒロイン、双方が快感の呻き声を漏らした。

（どうしてこんなのが気持ちいいの？ おっぱいが蕩けちゃいそう……）

乳房を擦るペニスの硬さが快感の波を湧き起こらせ、こね回される動きが胸の奥までむず痒く疼かせる。勃起した乳首を弄られると、それだけでイってしまいそうだ。

牡器官の熱気が乳房を疼かせ、まるで胸の内側を犯されているような気分になってくる。「もっ、もうすぐ出るぞ！ くっ、啞えろ！」

ルージュの口に、パイズリで爆発寸前まで高まったペニスがねじ込まれる。

「んぶううう！」

牡臭い味と欲情で張り詰めた亀頭の熱が、メタルヒロインの顔をしかめさせた。

異物を押し出そうと動く舌の動きが男の亀頭に快感を与え、低い呻き声と同時に射精が始まる。先走りの汁とは比べものにならぬ粘り気を持った濃い汁が舌に粘り着いた。

(苦い……ッ!!)

精液の不味さに嘔吐しそうになるルージュであったが、少年兵は喉奥までペニスを突き挿れ、力強い脈動を起こして食道内に絶頂汁を注ぎ込む。ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ……メタルスキンに包まれた細い喉が飲精のたびに恥ずかしい嚙下音を立てた。

「なんだ、もう出したのか？ まあいい、全部飲ませてやれ」

メタルスキン越しにルージュのクリトリスを摘み転がして嬲りながら、ネーナが早漏の部下にあざけるような声をかける。

「もっ、申し訳ございません……うっ、のっ、飲むんだッ!!」

口内射精の快感に震えながら言った少年兵は、逃れようとするルージュの顔をガツチリと掴んで固定し、欲望の煮詰め汁を最後の一滴まで流し込んだ。

ヌチュッ、射精を終えたペニスが粘音を立てて引き抜かれると、屈辱に歪むルージュの唇と亀頭の間在白濁汁が粘つく糸を引く。

左右の手に握らされていたペニスも絶頂寸前の痙攣を起こしていた。

「俺たちのザーメンも飲ませてやる！ まとめて……啜えろ！」

仕方なく開いた口の中に二本のペニスがねじ込まれ、交互にピストンする。頭を掴まれて喉を激しく犯され、味の違うスペルマのミックスカクテルを飲まされた。

さっきの倍量の射精を飲みきれず、唇の端から白濁汁がトロトロとこぼれ落ちる。

メタルスキンがもたらす新鮮な快感の虜になった兵士たちは、入れ替わり立ち替わりルージュに奉仕を求めてきた。乳房の谷間で勃起が弾け、口の中にスペルマが進る。

「親の仇に犯される気分はどうだ？ おまえの父親は実にいいものを発明してくれた」

精液の残滓にぬめった巨乳をグチュグチュと音を立ててこね回しながら、ネーナは熱い声で告げる。男たちに奉仕するルージュの痴態を見ているうちに、彼女も発情してしまつたようだ。

「そろそろ固いものを突っ込んで欲しいだろう。ここと……それにここにも……」
すつかり蕩けた膣口がグチュリと抉られ、アヌスにまで指がめり込んでくる。

8の字筋がキュウツと収縮し、挿入された指を逃がすまいと締めつけた。

「くはあああああんツ!!」

目の前が真っ白になるような喜びを送り込まれ、裏返った声を上げてしまうレッドエンフォーサー。肉体の疼きはコントロール不能なまでに高まってしまっている。

「こんな細い指ではイけないだろう？ もっと深くまで、もっと太いもので激しく突いて欲しいだろう？ 私におねだりしろ。そうすれば思いきりイかせてやる」

耳元でささやかれるネーナの声は、魔法の呪文のように脳内に響いた。

黒いメタルスキンで身体を、魔性の言葉と快感で心を侵蝕され、レッドエンフォーサーは肉悦の底なし沼へと引きずり込まれてゆく。

膺の奥まで突かれない、掻き回して欲しい……イかせて欲しい……そういうはしたない欲求が、煮えたぎる溶岩のように込み上げ、理性を焼き尽くした。

「くっ……くっ……ください……アタシの……オマ○コとお尻の中、グチュグチュってしてくださいイイイッ!!」

秘裂と同じぐらい濡れ蕩けた声を上げ、ルージュは屈服の言葉を叫んだ。

「くれてやるよ、太くてごついのを！ 奥の奥までなっ!!」

指が抜かれると同時に、ヴァギナとアヌスに生硬いものがめり込んできた。冷たい金属の感触が、粘膜を荒々しく擦りながら身体の奥に侵入してくる。

「メタルスキンでできたデイルドウの味はどうだ？ 気持ちよすぎて声も出ないか」

股間から二本のメタルデイルドウを生やしたネーナは、力強く腰を突き上げてルージュを責め立てる。女を狂わせるための機能をフル装備した液体金属の責め具が、極薄のメタルスキンを巻き込んでアヌスとヴァギナに挟り込まれた。

「アッ、アッ、アッ、はああああんッ!!」

突き上げのたびに絶頂の声を上げてしまうレッドエンフオーサー。身を守ってくれるはずのメタルスキンが、冷たい疑似男根となつて着用者を犯していた。

「スーツの中がドロドロだな……少し排水するか……」

ネーナの指が、スーツの股間にプツクリと尖り勃つたクリトリスを撫でる。その部分だ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>